

巻頭言

信州大学での学びを糧に

伊 豫 田 明

この度は、大変お世話になりました信州大学の先生方に御礼を申し上げる機会をいただき、誠にありがとうございます。平成25年6月1日付で、東邦大学医学部外科学講座呼吸器外科学分野教授を拜命いたしました。これもひとえに信州大学医学部時代にご指導いただきました先生方、そして良き先輩、同級生、後輩に囲まれ、充実した学生生活を憧れの松本の地で送らせていただいたおかげとっております。今回は信州医学雑誌の巻頭言を書かせていただく榮譽を賜り、身の引き締まる思いではありますが、折角の機会をいただきましたので拙筆ながら、これまでお世話になりました先生方への御礼と今後の抱負を述べさせていただきます。

私は昭和60年信州大学医学部医学科に入学し、在学中は野球部に所属しておりました。当時は旭会館前のグラウンドで、シーズン中毎日練習に励んでおりましたので、医学部の授業というより野球部の練習のために大学へ来ていたというほうが分かりやすいくらいの生活でした。体力を鍛えただけではなく、いろいろな意見に耳を傾け、異なった価値観に触れる大切さなど多くのことを勉強させていただきました。医局対抗野球の審判の後、各医局へ懇親会に伺い多くの先生方のお話を伺えましたのも良い思い出です。また、たくさんの友人と語り合ったことは今でもつい先日のごとくのように思い出されます。

平成3年に大学卒業後、社会福祉法人三井記念病院外科にて初期研修を行いました。毎日が合宿のような生活でありましたが、羽田圓城先生に呼吸器外科の魅力を教えていただき、さらに多くの著名な外科医の下で、数多くの手術を経験させていただいたことは非常に有意義でありました。時には過酷ともいえる4年間の研修を無事に乗り切れましたのも、大学時代に野球部で鍛えられたおかげだと思っております。現在胸部外科領域では、東京大学名誉教授、三井記念病院院長 高本眞一先生、呼吸器外科分野では、杏林大学名誉教授 呉屋朝幸先生、埼玉医科大学国際医療センター 金子公一先生、杏林大学 近藤晴彦先生、北里大学 佐藤之俊先生など、三井記念病院の先輩方が多数活躍されており、様々な面でご支援、ご指導をいただいております。

平成7年4月より、千葉大学医学部附属肺癌研究施設第1臨床研究部門（肺外科）に入局し、山口 豊先生に呼吸器外科学を基礎からご指導いただき、大和田英美先生が主宰されていた千葉大学医学部附属肺癌研究施設病理研究部門において肺癌を中心とした呼吸器病理を研究させていただきました。非常に雰囲気の良い中で、自由に研究をさせていただき、私のライフワークともいえる肺神経内分泌腫瘍の大細胞神経内分泌癌に関する研究テーマを大和田先生、廣島健三先生からいただいたことがその後の大きな転機となったと思っております。平成13年10月より千葉大学医学部附属病院にて藤澤武彦先生、吉野一郎先生の下で診療、教育、研究に携わる機会をいただき、平成20年4月佐藤之俊先生の教授就任に際し、佐藤先生の主宰される北里大学医学部呼吸器外科学教室へ赴任することとなりました。

北里大学では約5年間お世話になり、北里大学病院（本院）と北里研究所病院（白金）で診療にあたり、内視鏡手術で著名な渡邊昌彦先生にもご指導いただきました。北里大学赴任後、吉村博邦先生と佐藤先生の御尽力で、Memorial Sloan-Kettering Cancer Centerへ留学させ

ていただき、著名な胸部外科医である Valerie W Rusch 先生や大細胞神経内分泌癌を提唱した病理医である William D Travis 先生と共同研究をさせていただきました。

これまで私は、肺癌診療のテーラーメイド化に向けた診断、治療の研究を行ってまいりましたが、特に1999年に新たに分類された肺大細胞神経内分泌癌に着目して、その臨床病理学的および分子生物学的特徴を解析し、小細胞癌に準じた術後補助化学療法の有用性を世界で初めて報告しました。当初は非小細胞癌に分類されていた大細胞神経内分泌癌が、小細胞癌と同様に高悪性度神経内分泌腫瘍と認識されるようになり、さらには他の臓器でも大細胞神経内分泌癌が認識されはじめると、肺での経験に従って治療が進められるようになりました。これらの業績をご評価いただき2008年に日本呼吸器外科学会から第1回日本呼吸器外科学会賞をいただいたことはその後の大きな励みとなっています。

東邦大学は、医学部、看護学部を大森キャンパス、理学部、薬学部を習志野キャンパスに擁する自然科学系総合大学であり、1925年（大正14年）創立で2015年に創立90周年を迎えます。大学病院は私が赴任しました本院の東邦大学医療センター大森病院が大田区に972床を有し、その他に大橋病院（目黒区、455床）、佐倉病院（千葉県佐倉市、451床）と3病院をかかえ、建学の精神「自然・生命・人間」を基盤に、安全で質の高い医療の提供を目標としています。外科学講座呼吸器外科学分野として呼吸器外科を専門とする独立した講座は当教室のみであるため、臨床の実績はもちろん、研究、教育を充実させ東邦大学から呼吸器外科学に関する新しい研究成果を発信する要として期待されています。高木啓吾前教授が肺癌治療や気道狭窄に対するステント療法など多岐にわたる臨床実績を重ねられ、我々はその伝統を継承して昨年は280例の手術を施行し、肺癌、重症筋無力症、胸腺腫を含めた縦隔腫瘍、転移性肺腫瘍、気胸を含めた嚢胞性肺疾患、膿胸などの感染性疾患、外傷などに対する根治療法や間質性肺炎などびまん性肺疾患に対する生検、気道狭窄に対するインターベンション、ステント治療など、肺移植以外の呼吸器外科対象疾患は全て取り扱いました。現在は胸腔鏡下手術などの低侵襲手術に積極的に取り組み、当院にも da Vinci surgical system が導入されたため、今後は robotic surgery への対応も求められています。

今後の呼吸器外科医療は、より個別化がすすみ、再生医療の導入も視野に入れる必要があります。これまで、私は、胸腔鏡手術の積極的な推進、進行肺癌や重症併存疾患合併肺癌に対する積極的な拡大手術と安全な術後管理を推進してまいりました。今後も、これまでの方針を継続しながら、診療ではテーラーメイド医療の推進、低侵襲手術から拡大手術までの対応、robotic surgery など最新技術の導入を実施し、診療実績をさらに向上させたいと思います。研究に関しては、これまでの大細胞神経内分泌癌に関する研究を継続するとともに、当教室の伝統である COPD 合併肺癌、間質性肺炎合併肺癌に関する研究、気道疾患に対するインターベンションに関する研究に加えて、新しい時代の到来を見据えながら共同研究を推進し、再生医療など新しい技術を導入していこうと思います。さらに、最も重点を置いているのは教育です。多くの手術を経験できる環境を整え、一緒に技術を高めあいながら世界的に活躍できる研究意欲のある呼吸器外科医をここ「城南」の地で育てたいと思っています。

最後になりますが、これまでご支援をいただいた先生方に深く感謝しながら、信州大学での学びを糧に努力してまいりますので、これからも引き続き、御指導、御鞭撻をいただけますよう、よろしくお願いいたします。

（東邦大学医学部外科学講座呼吸器外科学分野教授）